語学研究についての提言

湯田　豊

序　論

外国語の実用的な研究において決定的に欠けているのは，目標である。わが国における高等学校や大学などにおける外国語の教育はほとんど効果がない，というのが実情である。外国語の学習と研究に費される時間と努力は巨大である。にもかかわらず，実際問題として，わが国における語学教育は，時間と努力の浪費以外の何ものでもないと思う。わが国における語学教育のなかで特に重要なのは英語であるが，中等学校および大学で英語を学んだ人の大部分は，卒業と同時に英語を忘れてしまい，会話はおろか，英文の手紙一通さえ満足に書けないというのが実情である。卒業後，彼らが英語の原典を読むことを期待することは，おそらく幻想であろう[1)]。

青春の貴重な時間を外国語の修得に費すのに，語学教育がこのように不毛な結果に終わるのは，一体，どうしてであろうか？ われわれは，この点について率直に反省する必要がある。外国語の実用的な研究において，研究の目標が欠けているのは致命的である。わたくしは次のような疑問を抱いている——われわれは学校や大学で，なぜ，外国語を学ばねばならないのであろうか？ もちろん，外国語が必要だからそれを学ばねばならない，というふうに考えることができるかもしれない。しかし，その場合には外国語を必要としない人にとっては，外国語の修得はあまり意味がない，という結論に到達せざるを得ない。実際には，学校や大学を卒業してから外国語を必要とする人はほんの一握りしかいないのである。大多数の人々にとっては，外国語は必要ではない。彼らは英語と無縁の世界で生活しているからである。このようなわたくしの考えに対して，あるいは人は次のように反論するかもしれない——外国語の修得は人間の心を訓練する上で役立つし，現代のような国際社会においては外国語の教養は不可欠である，と。しかし，わたくしはこれに対して次のように答えたい——外国語を通じて自分の心を訓練するためには，徹底して語学を学ばねばならない。中

途半端で浅薄な語学研究は，心を堕落させるだけであり，むしろ逆効果である。国際社会における外国語の重要性は否定できないが，単なる教養としての語学は無用である。知識は応用して始めて実用的になる。語学もこれと同じく，実地に活用してこそ意味がある。切れないナイフは，果してナイフと言えるのであろうか？ 活用することを知らない，単なる教養としての語学は，何の価値もない，と。

かつてアメリカの言語学者ブルームフィールド (Bloomfield) は，古典語および現代語の研究目標について，およそ次のように言ったことがある。彼によれば，「いわゆる文化的伝統あるいは連続性のために，ある部分の人口は古代の諸言語，特にラテン語とギリシァ語に通じているべきである。」[2] さらに，ブルームフィールドは言う——「他の国々との接触のため，および，特に，技術的および科学的な進歩に遅れないために，かなり多くの人々は現代の外国語を理解しなければならない。」[4] と。そして，ブルームフィールドは，語学研究の目標について，次のような結論を下した——「古代の言語において，そして，多くの学徒にとっては，現代語において求められるべき目標は，読解力 (the ability to read) である……」[4] と。

外国語研究の目標は，二つある。現代語については，ブルームフィールドの言う通りである。古典語については，次のように言っていいであろう——人類の知的遺産を忠実に保持し，これを後世に伝えるためには，古典語をマスターすることは不可避である。古典語を通じてわれわれは過去の天才たちの偉業を忠実に再現し，彼らの仕事を現代の立場から細心にしかも大胆に，大胆にしかも細心に，徹底的に再検討・再評価しなければならない，と。ブルームフィールドが指摘したように，ラテン語とギリシァ語の修得は不可欠である。しかし，ヨーロッパ文明だけが人類の遺産ではない。イスラエル，イラン，インド，中国，アラビアなど数多くの文明もわれわれにとっては貴重な遺産である。それゆえ，ヘブライ語，アヴェスタ，古代ペルシァ語，サンスクリット，中国語，アラビア語などの研究も極めて重要である。比較哲学の立場から言えば，人類の思想として評価されるのは，ギリシァ，インドおよび中国の哲学である。語学的に言えば，比較哲学を志す人は，ギリシァ語，サンスクリットおよび中国語に精通していることが要求される。

外国語を如何に学ぶか，ということは，確かに切実な課題である。しか

し，研究の方法を決定するのは，目標・目的である。方法はあくまでそれに対する手段にすぎない。外国語の学び方が問題になるのは，外国語をマスターすることを本気で望む人々だけに限られる。別言すれば，外国語の修得を必要とする人々にとってだけ，語学研究の方法が問題になるのである。どのようにすれば外国語をマスターすることができるかと問う前に，われわれはある外国語がわれわれの目的，われわれの生活にとって果して必要かどうかを反省しなければならない。もしも外国語の修得が必要でないとすれば，われわれは自己が真に必要とする目的・目標をほかのところに捜し求める努力をしなければならない。自己が真に必要としないものと中途半端にかかわり合うのは，人生の浪費である。

しかし，もしも外国語の修得が必要であることが認められれば，その限りにおいてわれわれは語学研究に没頭しなければならない。実に，必要は発明の母である。どうしてもある外国語をマスターすることが必要であれば，人はあらゆる障害を克服して必要最少限の知識を身につけることができる。しかし，その際，古典語と現代語の研究とは一応区別する方がよい。古典語は文語であり，現代語は口語である。語代語は，民衆によって日々話されている生きた言語である。すべての言語研究は現代語の研究から出発しなければならない——これがわたくしの確信である。ほかの学問領域においてもそうであるが，われわれは確実に知っている事柄から出発すべきである。われわれは古典語よりも現代語になじみ深い。それは，われわれ自身が現代人だからだ。古典語の世界は，われわれにはなかなか理解されない。その世界のなかで発言の機会を得ている人々の mentality は現代人のそれとは異なり，彼らの論理を正確に把握することは極めて困難である。

われわれは既知のものを通じてしか未知のものを理解することができない。古典語をマスターするためには，われわれは現代語に精通する必要がある。現代の外国語の初歩も知らない人が古典語をマスターするなどいうことはわたくしには想像することもできない。しかし，この論法を押し進めれば，われわれがあらゆる言語のなかでもっともよく知っている言語は母国語であるという結論に達する。あらゆる言語研究の基礎は，母国語をマスターすることでなければならない。もちろん，その際わたくしが念頭に置いているのは，現代語である。母国語研究の重要性を強調しなが

ら，わたくしは外国語の実用的な研究について簡明な説明をしてみたいと思う。

I. 語源と言語のより古い形態

外国語を研究する時，われわれがもっとも興味を抱くことの一つは，ある単語の語源 (etymology) である。確かに，語源の研究は言語学においても重要な部門の一つである。しかし，ある単語の最初の意味を穿さくすることは，あまり意味がない。ある語の歴史的発端については，われわれは，精々，推知することができるだけである。語源はわれわれに確実な知識は提供しない。語源は，ある語の起源についてわれわれにある種の期待を抱かせるが，結局，われわれは深い幻滅を味わうだけである。イギリスの言語学者スイート (Sweet) がかつて言ったように,「テキストの証拠が語源を決定するのであり，語源がテキストの意味を決定するのではない。」[5] からである。言語研究において決定的に重要なのは，語源ではない。それは，ある語が実際のテキストの文脈のなかでどのように使用されているか，ということである。要するに，ある言語の意味を決定するのは，語源ではなく，慣用 (usage) である。インド言語学においても，語源 (yoga) は危険なガイドである。ここでは，語の派生に基づいて語の意味を調べることは斥けられる。インド言語学において，語の意味を知る最良の方法は，テキストを捜し求め，それらのなかで語が実際にどのように使用されているかを確めることである。インド言語学においては，慣用 (*rūḍhi*) が語源よりも重視されている。

例えば，ここに *love* という英語の単語がある。この単語を動詞として使用すれば，その最古の形態は古代英語（アングロ＝サクソン語）の弱変化動詞 *lufian* である。それの不定詞は *lufian* であり，過去形は *lufode*, 過去分詞は *gelufod* である。現在分詞は *lufiend* である。Love の語源は *lufu* であると言われる。*Lufu* はわれわれに直ちにサンスクリットの lubh という動詞を連想させる。「愛する」ことは，語源から見れば，「欲する」ことにほかならない。しかし，*I love you* を「わたしはあなたが欲しい」と訳すのは無意味であると思う。「愛する」ということばの意味は言語慣用の問題であり，語源から推測することには無理がある。「愛す

る」ことが「欲する」ことだと言ってみたところで，現代人の言語感覚に訴えるものはないからである。

語源を偏重する際にもっとも危険なことは，根拠のない語源によってテキスト中で使用されている語の意味を決定することである。例えば，サンスクリットに upaniṣad ということばがある。マクス・ミュラーやパウル・ドイッセンはこれを upa-ni-ṣad（近くに，下に坐る）と語源解釈し，ウパニシャッドとは「師の近くに坐って弟子が秘密の教えを受けることである」と勝手に主張した。しかし，この語源解釈は間違いである。その理由は簡単である。全ウパニニシャッド文献のなかで，このような意味で upaniṣad という語が使用された実例は一度もないからである。この語の意味を確定する際，実際に存在する文献のなかで upaniṣad がどういうふうに使用されているかを，われわれは証拠に基づいて精査しなければならない。ヨーロッパの学者は，従来あまりにも語源を偏重して来た。今や，われわれはこのような語源偏重の学風を改め，言語の意味をテキストの証拠によって立証するように努力すべきであろう。実際に存在するテキストの文脈のなかで語義を確定するのが，正しい言語研究の方法である。語源は，われわれに確実な知識を与えないからである。

言語のより古い形態の研究は，確かに重要である。英語研究に関し，スキート (Skeat) はかつて次のよっに言ったことがある——"a real insight into English grammar can more easily be obtained by a week's study of Sweet's Anglo-Saxon Primer, or some similar work, than by years spent in reading treatises which ignore the older forms of the language"[6]。ある意味では，スキートの言う通りである。現代英語と古代英語の関係は否定できないし，また，古代英語を眺めていると，われわれはドイツ語に接しているような気分になることがある。Wē sindon gecumene という古代英語は，わたくしに現代英語の We have come を連想させず，むしろドイツ語の Wir sind gekommen を思い出させる。英語とドイツ語は骨肉の言語であり，古代英語に関する限り，アングロ＝サクソン人はドイツ語を話していたのではないかと思いたくなるほどである。しかし，それにもかかわらず，わたくしは言語のより古い形態を知ることが外国語の実用的な研究において必要であるとは思わない。重要なことは，言語がある特定の時代に特定の意味をもって使用されているという

事実である。ここで，わたくしは *say* という言語に触れてみたい。現代英語では say の直接法現在の一人称単数は say，二人称単数は say，三人称単数は say-*s*，である。古代英語においては，それはそれぞれ secge, sægst, sægþ である。古代英語の -þ は -t に相当するから，say-*s* の -*s* は -*t* の不規則な形であることが分かる。しかし，なぜ，-*t* という語尾が動詞の語幹に接続するか，という点については，われわれは何一つ知らない。言語のより古い形態についての知識は，この場合まったく役に立たない。語尾は最初から意味のない記号であったはずはない。それは，本来，具象的な意味をもっていたに違いない。しかし，そのことは言語のより古い形態によってさえ推知することはできない。

外国語の実用的な研究においては，語源および言語のより古い形態というような歴史的方法は，語学の初歩の研究者にとって，ほとんど役に立たない。英語の tongue に対する古代英語の形が tunge，英語の sister に対する古代英語の形が swestor であることを知っても，それによってわれわれの英語に対する理解が深まるわけではない。Tunge や swestor は現代ドイツ語の Zunge, Schwester と区別できないほど酷似している，ということくらいしかわれわれは感じまい。この点に関して，われわれはスイートのことばを引用しよう——「一定の言語の一定の期間におけるあることばの意味は慣用の事柄 (a matter of usage) であり，それがある初期の期間あるいはある同系の言語においてある意味をもっていたという事実は，それの現在の意味を決定することにおいて，まして，それを想起することにおいてかならずしも何らかの助けを提供するとは限らない。」[7]

II. 言語のむずかしさ

ギリシァ語やサンスクリットのような古典語のむずかしさには，定評がある。そして，多くの人はこれらの言語のむずかしさは名詞や形容詞などの屈折 (inflection) および動詞の活用 (conjugation) にあると考えている。しかし，スイートも言っているように，「真の，本質的な，外国語学習のむずかしさは，それの語彙 (vocabulary) をマスターしなければならないことのむずかしさのなかに横たわっている。」[8] のである。古典語たると現代語たるとを問わず，言語の真のむずかしさは，まさしく語彙をマス

ターしなければならないことだ！その際重要なことは，基本的な語彙をマスターすることである。そして，言語の生命は動詞である。女性の生命がその豊かな髪の毛であるとすれば，言語の魂は動詞である。

われわれは，まず最初に，基本的な語彙をマスターしなければならない。マスターするということは，何よりもまず，最少限の分量の語彙を記憶することである。語彙を確実に自分のものにする秘訣は，繰り返し (repetition) である。しかし，繰り返しといっても，単語を文脈から孤立させて機械的に暗記することではない。繰り返しとは，短くてやさしい文章を理解して記憶することだ。つまり，文脈のなかである単語がどのように位置づけられているかを知らなければ，語学研究は成功しない。しかも，語彙は短期間に確実に記憶しなければならない。

さて，記憶の short cut は，酒を飲む技術のなかに求められる。体質的に恵まれた人は別として，普通の人が酒に強くなるためには，まず一杯の盃を飲みほすことから始めねばならぬ。彼は毎晩少量の酒を飲むことを実践し，少しずつ酒量をふやしていけばよい。酒を飲むことを一日でも中断してはならない。記憶もまた飲酒の技術と同じである。語彙をマスターしようとする人は，できる限りすくない語彙を記憶することから始めなければならない。そして，新しい単語を覚える前に，すでに記憶した単語をもう一度確める努力を怠るべきではない。財産を獲得することも重要であるが，一旦獲得した財産を維持し，しかもそれをふやすことは，金持の務めであろう。

単語のマスターは，数学の学習と同じである。すなわち，単語の徹底的なマスターがここでは要求される。しかし，言語は優れて音声であるから，音声を正確にマスターし，音声と意味とを直結するように努力しなければならない。音声と意味とが直結しなければ，われわれは語彙をマスターしたとは言えない。しかし，語彙をマスターする際どのような連想 (association) の方法に訴えるかは個人的な事柄であるので，ここではそれについて述べるつもりはない。

もちろん，記憶力は機械的な方法で改善することができる。毎日，一定時間反復することは，記憶の最良の技術である。ラテン語の諺にも言う——abeunt studia in mores (研究は習性になる)，と。しかし，言語のむずかしさを克服するには，技術だけでは十分ではない。言語そのもの，あ

るいは主題に対する燃えるような情熱，深い関心・興味が必要である。かつてドイツの哲学者パウル・ドイッセン (Paul Deussen) は，ウパニシャッドを原典から直接読もうと決意し，この目的だけのためにサンスクリットを独習し，この言語をマスターした。後に彼はサンスクリットの翻訳者・解釈者として世界的に知られるようになった。

言語ないし主題に対する関心・興味が，語彙をマスターするための内面のばねである。しかし，語彙をマスターする際注意しなければならないことは，あまりにも細かく言語を分析せず，語彙を文脈のなかで正しく位置づけるように注意を払うことである。言語に対して敏感であることは必要であるが，あまりにも神経質な反応，過敏は，語彙の修得にとってマイナスである。言語は論理的な面と並んで非論理的な面をもっている。言語には情緒的な面が濃く残り，それは，いわば，原始的な精神状態の反映である。もちろん，言語をまったく分析しないことは語学マスターへの道には連ならないけれども，あまりにも神経過敏な，あまりにも些細な分析に捉われることは，語学研究にとって有害である。

すでに述べたように，語彙をマスターするためには，言語ないし主題に対して関心をもたねばならない。しかし，関心は昂揚される必要がある。異性に対して関心を抱くことは，健全な若者にとって当然のことである。しかし，単なる関心で終わるか，それとも関心が恋になるか——ここが別れ道である。語彙のマスターは機械的に単語の意味を記憶することではない。単語に対してある種の情緒的な反応を示すことが望ましい。実に，愛 (Liebe) なくして行われた行為はすべて空しく，それには何の価値もない。愛のみが人間の仕事に価値と意味とを付与するからである。ある単語のもつ音の響き，形象，香り，匂い——これらに対する心からの愛のないところには，真の意味の記憶はない。記憶力が優れているとか，あるいは劣っているとかいうことは，最終的には問題外である。問題は，人があることに本当に関心を抱いているかどうかである。人は心から関心を抱いている事物あるいは人間のことは決して忘れない。まして，心から愛している人の場合はなおさらである。たとい 20 年の歳月が流れたとしても，人は決して愛する人の面影は忘れない。語彙の記憶も，これとまったく同じである。

III. 文　　法

外国語をマスターする際，最大の武器は文法と辞書の二つである。辞書については省略して——語彙についてはすでに述べたから——ここでは文法について略説しよう。母国語を話したり読んだりする場合，われわれは文法の知識を必要としない。母国語の場合，われわれは無意識のうちに最少限の文法の知識を身につけているからである。しかし，外国語を研究する場合には，事情は全然違う。新しい言語をマスターしようとすれば，当然，われわれは文法と取り組むことから出発しなければならない。文法の重要性とは，要するに，言語を体系的に理解しようということだ。スイートのことばを借りて言えば，文法によって a general bird's eye view of the language を得ることが必要である。かさばった文法書は，かさばった辞書と同じく，語学研究において何の役にも立たない。そういうような文法書は，語学研究の関心を減退させることには役立つかもしれないが……なるべく簡略な文法書を捜し出し，必要最少限の文法の規則をマスターすることが，最良の方法である。文法書のなかには不必要な説明があまりにも多い。不必要な部分，非本質的な部分は全部省略し，ある言語をマスターするのにどうしても必要な文法の規則，文の基本構造を説明してくれる文法書が，よい文法書である。

言語の研究にはかならず困難が伴う。古典語だけではなく，現代語もむずかしいという点では同じである。ある言語にはその言語特有のむずかしさがあり，そのむずかしさが何であるかを，われわれはあらかじめ知っておく必要がある。そして，あらゆる言語は短期間に集約的にマスターしなければならない。すべての文法も同様にむずかしい。しかし，最初の困難を克服すれば，道はおのずから開かれる。文法をマスターできるかどうかは，最初の数ヶ月で決まる。読むだけの目的であれば，如何なる文法であろうと六ヶ月以内にマスターすることができる[9]。語彙の場合にはそう簡単ではないが，文法の学習は比較的短期間に可能である。逆に言えば，短期間に文法の基礎を身につけていなければ，その後長期間——例えば，12 年間——その言語を研究しても，その人の語学力は以前とくらべて著しく進歩することはない。古典語の場合には，2，3 年以内に著しい進歩がなければ，語学研究は絶望的である。言語の研究においては，最初の段

階が重要である。文法は六カ月以内にマスターしなければならない。ギリシァ語やサンスクリットの文法は確かにむずかしいけれども，半年以内にマスターすることは可能である。ラテン語の場合も同じである。現代語の場合には，もっと短い期間にマスターすることができるであろう。「鉄は熱きに打て」である。言語もまた，その印象が新鮮なうちに，一気に征服すべきである。特に若い人は体力に恵まれているから，かさばらない，簡明な文法書さえ選べば，あらゆる文法を短期間にマスターすることができるはずである。

文法の征服は，最少限の規則を身につけることから始まる。しかし，問題は何が最少限の規則か，ということである。もちろん，文法には音韻論，語形論および文章論の三つが含まれている。ある言語にとって，音韻はきわめて重要である。言語の生命は文字ではなく音声である。音声の正しい理解は，文法の出発点である。そして，音韻論をマスターしたあとで，われわれは語形論と文章論へ向かわねばならない。もちろん，語形論は絶対に必要である。名詞や形容詞の曲用や動詞の活用を知らなければ，われわれは原文を一行も読み進むことはできない。しかし，古典語の学習においては語形論が偏重される傾向がある。ここでは，語形論と文章論とが分離され，このような古典語研究の原理が現代語の学習・研究にも応用されている。語学教育の禍根は，まさしくこの点にある！言語の単位は単語ではなく文章である。従って，文法をマスターする際には語形論と文章論とを分離し，語形論を終えてから文章論へ進む，というふうに考えるべきではない。語形論と文章論とは並行して進めるべきであろう。語形は文脈から切り離して単独に学ぶべきではなく，文章の構造のなかに然るべく位置づけるべきであろう。語形は，文脈のなかでほかの単語との関連のなかで学ぶ必要がある。

わたくしは，外国語研究の出発点として文法の規則に精通することを強調した。しかし，このことはわたくしが文法を規則の面から理解するということを意味するものではない。文法の規則は，言語現象を説明するために必要なのであり，文法規則によって言語の自由な発展を阻止すべきではない。文法は，一旦マスターしたからには，捨て去ってよい。語彙の場合には，これを記憶し続けることが必要であるが，文法の場合にはかならずしもそうではない。文法を意識しないでも自由に文献を読めるようになれ

ば，それは堕落ではなく進歩である。文法の規則は原文を理解するための一つの踏み台であり，この目的を達すれば，文法の規則はもはや必要ではない。文法の規則を絶えず持ち出さないでも正確に原文を理解することができるほど徹底的に文法をマスターしていれば，別に文法を意識しなくてもよいはずである。われわれは，母国語の場合のように文法を忘れることをめざしてもいいのではないか?

古典語の場合には，言語はもはや発展することはないから，文法の規則によって言語現象を理解することは比較的容易である。サンスクリットのような死語 (dead language) は，この意味で比較的学びやすい言語である。もっとも，サンスクリットは今なお生きている言語であると考える人もいる。サンスクリットが死んでいるか，あるいは生きているかは，定義の仕方で決まることだが，わたくしはスイートとともに死語であると考える。この言語はかつては方言をもち発展していたが，後に方言をもつことをやめ，パーニニによって細部に至るまでその用法を規定されてしまった。つまり，サンスクリットは発展するのをやめた言語である。発展するのをやめた存在のことを，われわれは，普通，死んだと言う。しかも，この言語は現在インドの一般民衆によって話されていない。一般民衆が日々話していない言語が，どうして生きていると言えるのであろうか?

現代語は，日々われわれの眼の前で生々発展を続けている。現代語は，小児であろうとあるいは乞食であろうと，誰でも自由に話せる。しかも，それには豊かな方言がある。パーニニ文法によって細部まで規定され，ほんのわずかの違反も許されないような言語，一握りの学者（パンデット）しか話せないことばが，果して生きていると言えるのであろうか? 現代語の場合には，文法は生きた言語の事実をあとから説明するだけである。言語の発展が文法の規則によって規定されることはない。言語が死んでしまえば，このことは可能であろう。しかし，言語が発展し続けている間は，文法の規則といえども言語の発展を阻止することはできないし，また，阻止すべきでもない。ある言語の現象を説明する文法の規則が不適当な場合には，むしろ文法理論を修正すべきであり，規則に合わせて言語の使用を修正すべきではない。文法の規則によって言語を理解する代わりに，われわれはむしろ言語の事実 (the fact of language) に照らし言語そのものを理解しなければならないと思う。

IV. 訳

外国語をマスターしたかどうかは，外国語を母国語に訳す能力があるかどうかによって測られる。現代語の場合には，母国語を外国語に訳すという問題も含まれる。しかし，いずれにせよ，母国語とのかかわり合いを離れて外国語の修得を論じることはナンセンスである。母国語を外国語に訳すという作業は，極めてむずかしい。その場合には，われわれはその外国語について徹底的な，しかも workable な知識をもつことが要求されるからである。

要するに，外国語をマスターしたかどうかは，訳をする能力があるかどうかによって決まる。かつて一度も訳を試みたことのない人は，語学者としては全然通用しない。そういう人は，歌わない歌手，描かない画家，演説しない演説家と同じである。いやしくもみずからを語学者とみなす人は，すくなくとも生涯に一度は当該の言語に関して訳を公けにする義務がある。さて，訳に関して，スイートの考えを参照しながら，ここで若干の問題を指摘しよう。

外国語をマスターする第一の条件は，母国語の特性について徹底的な知識を修得することである。われわれがどれほど外国語に習熟しようと，外国語は，所詮，外国語である。外国語で考えることが語学教育の目標とされ，わが国でも thinking in English というモットーが掲げられている。しかし，われわれは外国語で考えることはできない。われわれが自由にしかも深く思索するためには，われわれはもっとも得意とする言語に頼らなければならない。このことは，自明の原理ではなかろうか? そして，われわれがもっとも得意とし，自由に駆使できる言語は母国語を措いてほかにはない。母国語をマスターしているという前提がなければ，外国語研究には何の意味もないし，外国語を母国語に訳すということも不可能である。わが国にもドイツ語崇拝者やフランス語マニアの数は決してすくなくないが，彼らは明らかに間違った前提に立っている。われわれ日本人にとってもっともいとしい言語は，ドイツ語やフランス語，あるいは英語ではない。それは，日本語である。かつて作家の志賀直哉は，日本語を廃止してフランス語を国語にせよ，と主張したことがあるが，フランス語狂もここに極まったという感じがする。外国語研究の真の基礎は，日本語について

の徹底的な知識と日本語に対する愛である。二つのうちいずれか一つが欠けても，語学研究はその基礎を奪われる。

外国語を母国語に訳すという試みは，われわれの外国語の知識を正確なものにする。その場合，われわれはやさしいテキストの訳から出発しなければならない。そのうえ，テキストの内容がわれわれに熟知されていることが必要である。外国語はもともとわれわれにはなじみ深いとは言えない。外国語の世界は，われわれと疎遠な世界である。われわれになじみ深い思想を盛った内容の，極めてやさしいテキストを母国語に訳すことが，語学上達の short cut である。そして，外国語から訳す場合には，すでに母国語に翻訳されたことのあるテキストを選ぶとよい。まず母国語に訳された翻訳を熟読して内容を把握したうえで，原文を精読し，そのあとで正確な試を試みるべきである。その際，なるべく辞書は参照せず，原文自身の文脈から文章の意味を解読するように努力すべきであろう。辞書はやむを得ない場合にだけ参照すべきである。入手できる翻訳を利用せず，オリジナルだけで読むのは，危険な方法である。

母国語のマスターといい，翻訳の利用といい，要は，われわれ自身がすでに身につけている最少限の既知の知識を最大限に活用することを意味する。既知の知識を利用して未知の世界を支配するというのが，語学研究の第一歩である。そして，既知の知識の量がどれほどわずかであろうと，この財産，この貯蓄がなければ，われわれはどうすることもできない。例えば，ここに一つだけ実例を挙げよう。英文科の学生にとって，古代英語をマスターすることはそれほどむずかしくはなかろう。なぜなら，彼らは現代英語を中等学校時代に6年間も学んでいるからだ。しかも，彼らは英文科に籍を置く以上，当然，キリスト教の教養もすこしは身につけているはずだ。だから，彼らは新約聖書にも多少のなじみがあろう。そこで，わたくしは新約聖書の古代英語訳をここに示そう——

Ne mæg nān mann twæm hlāfordum þeowian: oþþe hē ānne hataþ and ōþerne lufaþ, oþþe hē biþ ānum gehīersum and ōþrum ungehīersum.

この文章は，マタイによる福音書，6，24 の訳である。古代英語の訳は

コイネーで書かれた新約聖書のテキストの忠実な訳ではないが，英語を学んだ人にとって容易に判読できる程度の内容であろう。

母国語を外国語に訳すのはむずかしい。例えば，英作文などがその代表的な例であろう。しかし，英作文においてスタイルの独創性を要求するのは間違いである。どれほど語学に堪能であろうと，外国語の作文において人が独創的であることは不可能であるからである。よい英作文というのは，要するに，current English を模倣するだけのことだ！スイートは，「われわれは，われわれ自身の言語においてだけ独創的であることができる。」[10] と言ったが，これはけだし至言であろう。独創的な人間は母国語で考え，母国語で話し，母国語で書き，母国語に限りない愛と誇りをもっている。独創的な心，批判的な精神は，機械的な外国語の研究よりもむしろ母国語を磨き，母国語で表現する傾向がある。独創性のない人，独立の思想をもたない人は，往々にしてその記憶力にものを言わせて数ヶ国語をマスターしたと称するが，彼はただ外国語を模倣し，外国語を崇拝し，外国語に随喜の涙を流すだけだ。彼の思想は自立的ではなくて折衷的であり，何の屈折ももたず浅薄であり，彼が人類社会に寄与する可能性はまったくない。彼にはもともと創造の精神が欠けているのである。独創的な人は語学を研究することをためらい，独立の精神をもたない parrot linguist はただ機械的に語学を学ぶだけである。

作文については，結局，手紙を書くこと (letter-writing) 以上のことを，われわれは求めるべきではない。それだけで十分である。スイートとともに，わたくしはこのように考える。しかし，現代語の作文については，積極的に評価してよい面もある。これに反して，古典語で作文することは，まったくナンセンスであると思う。いずれにせよ，母国語で表現することがもっとも重要である——わたくしはこのように言いたい。たとい英作文の価値を認めるとしても，外国語の作文は決して独創的なスタイルをもつことはあり得ないということを，ここでもう一度強調したい。

V. テキストの読み方

外国語研究の目的は，テキストを読むことである。もちろん，会話も語学研究の一部門であるが，最終的にはテキストを読むことの方がはるかに

重要である。しかし，テキストの範囲は広く，それは手紙から単行本に至るまで外国語で書かれたすべての文献を含む。文法や辞書などの類いはテキストを読むための補助手段にすぎない。文法の規則に精通し，語彙を豊富にするのは，決して言語の構造を熟知するためではなく，テキストを正しく読むためである。言語学者は言語の性質と構造を知ることをめざすが，それ以外の人々はすべて例外なく言語を何かあるほかの目的に対する手段とみなすのである。人々は言語を通じて外国の風俗習慣，あるいは文化や社会，思想や技術などを学ぼうとする。広い意味の文化を，人はテキストのなかに求めるわけである。

テキストを研究することは，決して機械的に読むことではない。それは人間としての生き方に反する。人間が人間としての威厳を保つことができるのは，ある程度独立の思索を行なうことができるからである。テキストを研究する真の理由は，独創的でしかも生産的な読み方を学ぶためである。機械的なテキストの研究によって浅薄さに陥り，心を堕落させて文献の奴隷になることがテキスト研究の目的なのではない。独創的に読むこと——これがテキスト研究の真の意味である。

機械的な作業は決して研究とは言えない。独創的な研究のないところには，テキスト研究は存在しないからである。文法をマスターし，語彙を豊富にしたところで，独創性に欠けていれば，彼の「研究」は果して研究と言えるのであろうか？ 浅薄さは，折衷主義同様，学問の敵である。深みに欠け，洞察力を伴わないテキスト研究は，言語研究の名に値しない。翻訳の場合も同じことが言える。スイートは，翻訳について次のように述べている——「もしもテキスト——そのオリジナルが入手しやすい——が文字通りの訳であれば，独創性はほとんどゼロになってしまうであろう。大言壮語して独創的な研究と呼ばれるものの多くは，純粋に機械的な仕事である。それはほとんど銀行員の日課よりももっとすくない独創性を彼らに要求する。」[11] と。

テキストを読む際重要なことは，すでに述べたように，翻訳を座右に置き，なるべく辞書を参照せずに全体の文脈から文章の意味を理解することである。韻文よりも散文が，長文よりも短文が，古風な文体よりも現代文が，難解な文章よりもやさしい文章が，初学者の研究に適している。そして，テキストは単調なものよりもむしろ変化に富んだものを選択するとよ

い。しかし，ある程度の語彙をマスターした時には，なるべく短い作品——もちろん，われわれになじみ深いものという限定が伴うが——を通読することを企てるべきである。

古典語の場合，われわれは第一級の作品を原典で読むことをめざすべきであろう。古典のなかには現代人の眼から見て意味の分らない部分がすくなくないが，長年月の星霜に耐えて来た作品は，ただそれだけの理由からも読む価値があると思う。しかし，現代語の場合にはまったく事情が異なり，読むに耐えない書物があまりにもおびただしく生産され，読書界に多大の害毒を流している。その代表的な例が博士論文である。博士号を取得するために書かれた論文は，あらかじめ特定の専門家に読んでもらうことを目的とし，一般の読書人のことは全然眼中に入れていない。スイートは，旧制の博士号請求論文についておよそ次のように批判している——このような制度の害悪をもたらしたのはドイツであるが，博士号請求論文は独創性に乏しく，過剰生産されている，と。スイートは次のように言う——「無用でしかも不必要な文献に対するある種の税は，大いに必要である。」[12] と。今日においては，事情はむしろ悪化の一路を辿っている。専門が極度に細分化し，学者は専門語という美名の下にタワゴト (jargon) の生産に明け暮れている。筆者以外の人々には何の価値もない論文をテキストとして選ばなければならない理由は，どこにもないように思われる。

われわれは，テキストを独創的に読まなければならない。しかし，独創的に読むというのは，一体，どういうことであろうか? 独創的であるということは，要するに，最高に自己自身であるということだ。そして，それは同時に個性的であることと同じである。テキスト研究の目的は，テキストを通じてわれわれが個性的な反応を示すことである。テキストの研究とは，読者が読むことを通じて独立の思索，生産的な思考へと刺激されることでなければならない。文献の奴隷には，独立の思想はない。そのような人は機械的に読み，機械的に訳し，機械的に解釈するだけである。テキスト研究の目的は，文献への隷属から解放されて，自己の世界，精神の自由を額に汗して獲得することである。

結　論

すでに繰返し述べたように，テキスト研究の目的は，テキストを読むことである。しかし，われわれはテキストを読むことに終始してはならない。単なる読書は，人生の大いなる浪費である。テキストを読んで考えることをしなければ，これが人生の浪費でなくて何であろう！単にテキストを読むだけでは，まったく読まないのと同じことではないか? 彼はテキストから受動的に受け入れるだけであり，それを通じて何かを生産することをしないからだ。研究者がテキストのなかに何も見ず何も観察しなければ，テキストを読む行為は無益な情熱である。テキストは権威 (authority) であってはならない。それは，われわれにとって思索の素材でしかない。テキストを通じて，われわれは特定の問題を提示される。しかし，この問題を解決するのは，テキストを読む人自身である。研究とは，結局，問題に対する自己自身の特定の答えを模索することだ。そして，模索するという行為は，*consensus* を拒否して独自の道をひとり行くことだ。孤独に徹する以外に，独創性は育くまれない。そして，このような独立の精神，独創的・生産的な思考自身が，語学研究の真の目標である。

〔注〕

1) Leonard Bloomfield, *Language*, London, 1935, p. 503 参照。
2) *ibid.*
3) *ibid.*
4) *ibid.*, p. 505.
5) Henry Sweet, *The Practical Study of Languages*, Oxford University Press, 1964, p. 259. なお，本書の初版が出版されたのは，1899 年である。
6) 故細江逸記博士の『精説英文法汎論』(第一巻，東京　泰文堂，昭和 15 年) の Forword to the First Original Edition, ii によれば，ここに挙げられた文句は Skeat, *Specimens of English Literature* に対する Introduction のなかに見出される。わたくしは，本書を参照できなかった。
7) *ibid.*, p. 87.
8) *ibid.*, pp. 64–65 参照。
9) *ibid.*, p. 65 参照。
10) *ibid.*, p. 220. なお，このほか pp. 79–80 参照。
11) *ibid.*, p. 261.
12) *ibid.*, p. 262.

〔付記〕 このエッセイを書くに際しては，Henry Sweet の *The Practical Study of Languages* に負うところ多大である。本書は 1899 年に初版が出版されたにもかかわらず，今なお語学研究に関して多くの，示唆に富んだ洞察を含んでいる。彼の所説には傾聴すべき点が多い。なお，Leonard Bloomfield の *Language* は学生時代に読み，感銘を受けた書物の一つである。本書は，言語学を志す人にとって必読の文献であるだけでなく，一般の人々にとっても最高に有益な書物であると信じる。しかし，*International Encyclopedia of Unified Science*, vol. 1, No. 4 (Chicago: University of Chicago Press, the tenth edition, 1969) に掲載された彼の論文，Linguistic Aspects of Science を読む機会に恵まれなかったことは，かえすがえすも遺憾である (Y. Y)。